オスティアにおけるミトラエウムと浴場の分布とアプローチに関する考察

金原 武尊

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

古代ローマ帝政期、帝国各地で都市が建設されており、民衆たちは都市生活を享受していた。ローマの都市には、神殿やバシリカなどを包含した広場や円形劇場、公衆浴場など民衆のための公共施設が整備されていた。今回の研究対象であるオスティア・アンティカもこれまでの発掘と研究の成果によって同様の都市構造を持っていたことが分かっている。当時のオスティアは首都ローマの物流の拠点として栄えた港湾都市であった。

物資とともに人種や文化がオスティアに導入され、 多様な宗教活動があったことが想定される。実際に、 カピトリウム神殿のような大規模なものから、既存の 建物の一室に設えられていた小規模な礼拝空間など数 多くの宗教に関連する遺構が残っている。オスティア の都市には、神殿や泉など神聖な場所が点在している ことからも宗教は日常生活の一部であったことがうか がえる。その中でもミトラエウムと呼ばれる宗教施設 はオスティア全体に広く分布しており(東西約 1.5km 南北約 0.5km程度の広がりを持つ都市であるオスティ アに1 4 か所現存)、民衆からもとくに人気があった ことがうかがえるい。ミトラエウムはミトラ教の儀式 を行うための空間であり、先行研究によると、その配置はより人目のつかない、より内部の場所が好ましかったと考察されている²⁾。下図のオスティアの平面図でミトラエウムの配置を確認すると特徴的であることが分かる。確かに、先行研究によって考察されているように路地の最奥など一見隠された配置に見えるが、全部で14カ所あるうちの8カ所のミトラエウムが、人気のあった公共施設である公衆浴場のすぐ近くに配置されていることが分かる。ここで、オスティアの人々にとって宗教活動も浴場での入浴も日常生活に密接に関わっていたことを考慮すれば、これらの施設には親和性がありミトラエウムの配置は公衆浴場との計画性があった可能性がある。

そこで本研究では、このミトラエウムと浴場を都市 におけるロケーションとアプローチの観点から分析を 行い両者の関係性を考察することを目的とする。

1-2 研究の対象

図1の平面図上で14のミトラエウムが確認できる。 このうち周辺の遺構が発掘されており、アプローチが 明らかになっている以下の11カ所を対象として分析 を行う。

2. ミトラ教と浴場について2-1 ミトラ教

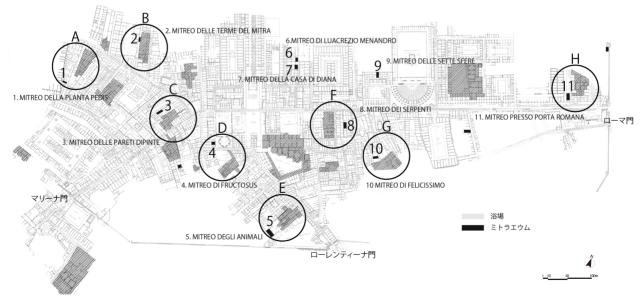


図1ミトラエウム、浴場の分布

ミトラ教とは古代インド、イランのミトラ信仰に起源をもつ密儀宗教である。皇帝たちの遠征がイランと地中海を結び、代々の併合がローマ世界へミトラ教を広げる第一のきっかけとなった。属州となった兵士や商人たちは出身地を離れることが多く、いく先々でミトラを崇拝し、ミトラ教の主要な布教者となった。ヘレニズム以降商人たちの多くがローマ近郊のオスティアにも流入し、同時にミトラ教を導入した³)。オスティアでは、2~4世紀に人気が頂点に達したが、その後キリスト教の隆盛によりミトラ教は衰退していったと考えられている。密儀は本来、洞窟で雄牛を犠牲にするというものだったが、形骸化しミトラエウムで儀式(内容は判明していない)を行うようになった。2-2

ミトラエウムの空間的特徴

ミトラエウムは、礼拝専用の個別の建物は持たず、2世紀半ばから4世紀後半までに既存の建物の一室をミトラエウムに改築したものだった。改築は、開口部を塞ぐ、壁を追加する、半地下にするというものだった。長さ約8~12m、幅約4~6m程度の大きさを持つ空間で、最大のもので40人程度が、使用していたと考えられている。構成としては、短辺の一つ(もしくは隅部)が入口となり祭壇が設置されていた反対側の辺まで身廊がまっすぐと通され両サイドにはベンチが設置されていた。また、窓はほとんどなく、非常に暗い空間で儀式を行っていたと考えられる。

2-3 浴場

公衆浴場での入浴は古代ローマ人の都市生活において欠かせないものであり、豪華な大浴場から、小規模な公衆浴場まで様々なタイプの浴場が都市に組み込まれていた。オスティアにおいては、20の中小規模の公衆浴場が存在し、ほとんどすべての階級の人々が利用できたと考えられている⁴)。そこは、体を清潔に保つという目的だけでなく、市民たちにとっての社交場であった。そこでは、運動場やレストラン、などが併設されており入浴以外にも、様々な活動があった。また、宗教との直接的な関係はないにしろ、各浴場に神々の像やモザイクが設置されていることを考えると、神々とは少なくとも結びついていたことはほぼ確実である。

2-4 ミトラエウムの分類

まず、公衆浴場の近くにあるミトラエウムとそうでないものを区別し、前者をセットとして見て考察を進めていくためにグループ化を行った。

1-1で述べた通り、14カ所のミトラエウムのうち8カ所が浴場の近くに位置している。ここで、これらのミトラエウムを①浴場の近くにないミトラエウム,



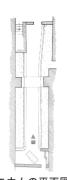


図2 ミトラエウムの内部空間 (MITREO DELLE TERME DEL MITRA)

図3 ミトラエウムの平面図 (MITREO DI FELICISSIMO)

②浴場の近くにあるミトラエウムに分類した。また② に関して、それぞれのミトラエウムについて近くの浴場とグループ化を行う。グループ化は、ミトラエウムとそれが位置している同じ路地内、もしくは一つ道を挟んだすぐ近くにある浴場を1グループとして②のミトラエウムについてそれぞれ行った。

①浴場の近くにないミトラエウム

図1の6,7,9がこれに該当するミトラエウムである。 浴場近くにないミトラエウムの特徴としては、ミトラ エウムが設置されている建物の最奥の角に接する室に 配置されていることである。街路に出るまでの経路が 複雑である。

②浴場の近くにあるミトラエウムとグループ

図 $101 \sim 5$, 8, 10, 11がこれに該当するミトラエウムである。また、図10とおりにグループA, B, C, D, E, F, G, Hを定める。20ミトラエウムの周りには0と比較して細い路地(図4)が発達している。ほとんどが路地とつながっているか、路地からアクセスしやすいところにある。20のミトラエウムと浴場は実際に

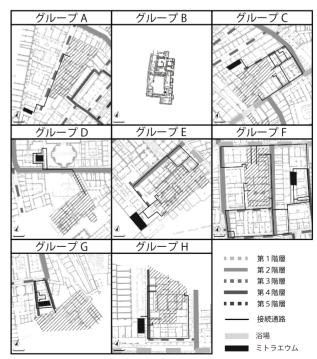


図4 ミトラエウムと浴場のロケーション

この路地を使うことで、主要街路を使わない。 往来が可能である。

3. ロケーション

まトラエウムと公衆浴場のオスティアの都市構造における位置づけを調べるために、都市の階層性を用いて街路をもとに分類を行った。1980年代にHillierらによって提唱されたスペースシンタックス理論⁵⁾(以後SS理論と呼ぶ。)は都市構造を個々の都市空間(街路やオープンスペース)のつながりから解析する手法であり、SS理論で、彼は街路のアクセス性や複雑性を表す深さ(depth)、つまり階層性を見いだした。オスティアの都市構造については、stögerによってSS理論を用いた研究が進められたが⁶⁾、遺構の発掘状況から一部しか都市空間のつながりが十分でなく、都市の奥まった場所までは正確な階層性がわからない。そこで本研究では、次のように都市の階層性を定義したい。

3-1 街路の分類

古代ローマの都市の中心部を東西に通る大通りの ことをデクマヌス・マキシムス (Decumanus Maximu)、 南北に通る大通りのことをカルド・マキシムス (Cardo Maximus) と呼ぶ。この二つの大通りは、オスティア を囲む城壁の門とつながっており、オスティアに入る 際にはまずこの二つの大通りに出ることになる。ゆえ にデクマヌス・マキシムス及びカルド・マキシムスを オスティアの道の第一階層とし、またその道に接続し た入口を持つ施設を第1階層の施設と定める。そして、 第1階層に接続する道を第2階層とする。同様にして、 第3階層以降も定める。なお、複数の異なる階層に接 続している街路の場合は、最も数字の小さい階層から 出ている街路として階層を定める。施設の場合も同様 に、複数の異なる階層に施設が接続している場合は最 も小さい道の階層を施設の階層に定める。図5が階層 ごとに分類を行った図である。

3-2ミトラエウムのロケーション

3-1にて、階層ごとに分類できた。これを基にして、ミトラエウムのロケーションを調べる。1-2で述べた通り対象は11カ所である。第1階層に属する建物内にミトラエウムが存在するものが0カ所、第2階層が2カ所、第3階層が5カ所、第4階層が4カ所であり、ミトラエウムはメインストリートから外れた場に位置する傾向があることが分かり、これまでに先行研究において、考察されてきたとおり都市の奥まった場に位置していたことが分かった。

3-3 浴場のロケーション

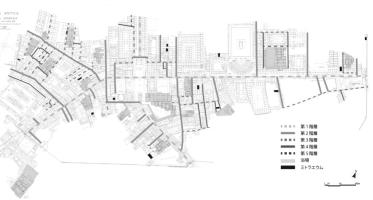


図5 オスティアの階層分類

続いて、浴場のロケーションについても考察を行う。 対象は、図1の14カ所である。第1階層に属する浴場が6カ所、第2階層が4カ所、第3階層が3カ所、 第4階層が1カ所であった。14カ所のうち10カ所が第2階層以上に位置し、ミトラエウムと比較してかなり公共性の高いロケーションであるといえる。古代ローマ都市においては、広い階級の人々で公衆浴場に通うことが日課であったことを考えるとよく理解できる結果となった。

3-4 考察

それぞれのロケーションについては、オスティア全体として浴場がミトラエウムよりも上の階層にあり公共性が高い傾向にあるということが確認できた。次に、個別のグループ内でのミトラエウムと浴場の街路の関係はどうかを確認する。図4より、各グループのうちA,C,E,F,Hは浴場がミトラエウムよりも上の階層に属していることが分かる。また、それ以外のグループのD,Gは、どちらも同じ階層に属している。Bについては、浴場であるTerme del Mitra内にミトラエウムが設えてある。ここで、もう一度図4で両者の関係を見ると、ミトラエウムと浴場をつなぐ細い路地は街路や階層を飛び越えて両者を接続できることに気づく。つまり、浴場を通じて深い階層に入り、ミトラエウムに行った可能性がある

4. シミュレーション

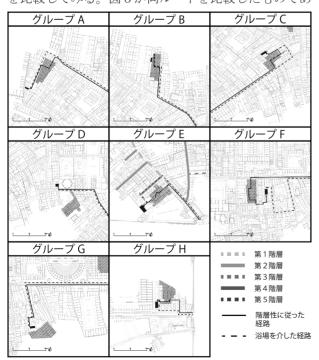
これまで2,3章において、ミトラエウムと浴場は近くに位置し、ミトラエウムは浴場よりも都市の奥の階層に属している傾向があること、そしてそれらが細い路地でつながっていたことが分かった。また、それぞれのグループ内で見てもミトラエウムは必ず浴場以下の階層に属していることが理解できた。では、当時のオスティアに住んでいた人々、訪れた人々がどのように都市を歩きミトラエウムと浴場を利用していたのかを4章で示す。オスティアを歩く人がミトラエウムにどのようにして行ったのかをシミュレーションするこ

とで、ミトラエウムと浴場についての関係を検証する。 4-1 先行研究

ミトラエウムまでのアプローチを示すにあたって は、先行研究を参考にすることができる。Roger Ring は、古代ローマ都市において特定の目的地へ行くとき に、どのようにして人々は歩き目的地に行ったのかに ついてポンペイを例に考察を行っているで、当時の 古代ローマの都市には、現代の郵政システムなどにみ られるような詳細な住所やナンバリングシステムが存 在した証拠はなく、道路標識などによって道順が示さ れた証拠もまた発見されていない。この研究によると 特定の場所を探してポンペイにやってくる人は、4分 の1の区割りと通りをもとにして道を尋ねた。そして ポンペイの人々は訪ねてきた人に認識のしやすいラン ドマークを介したその場限りの道案内を行っていた。 その際には、都市に分布していたニンファエウムやタ ベルナ、ポルティコ、寺院(交差点に配置されたもの) はとても良い目印であった。また、こうした道案内は ローマ時代の標準的な慣習であったことが当時の落書 きからわかっている。

4-2 ミトラエウムまでのアプローチ

古代ローマの人々は街路の階層性に従った最短ルー トをとる歩き方をするのではなく、むしろ目印となる ような場所を経由しながら目的地に向かっていたとい える。ではここで、オスティアにおいても同様である として一番近くの門からミトラエウムまでの道順を階 層性に従った最短ルートと浴場を介して向かうルート を比較してみる。図6が両ルートを比較したものであ



ミトラエウムまでの道順

る。グループEを例にとれば、ミトラエウムは大通り から路地を二つ経由した第3階層に配置されており、 浴場は第1階層に属している。階層性に従ってミトラ エウムまで向かったとすれば第1階層から第3階層ま で順に下ってゆくが、浴場を介して向かうことで第1 階層から直接、第3階層のミトラエウムまでアプロー チすることができる。この特徴はグループD, G以外で 見られる傾向である。このことから、ミトラエウムは 浴場とつながることで位置している階層に対して公共 性は上がるといえる。つまり、ミトラエウムの分布は、 密儀宗教という性格上都市の隠された場所にあるとさ れてきたが、むしろ人々に開かれた場所であった可能 性があったといえる。しかし、グループD, Gは、ミト ラエウムが先に現れる例である。グループDは、ミト ラエウム単体でのアクセス性が高いことや両者の間に 大きな街路を挟むこと、すでに公共施設内にあること から、本研究で考察されているような性格を持つもの ではない可能性がある。また、グループGについては、 浴場の発掘部分は一部であり、周囲の街路との関係が 明確でないため、今回行ったシミュレーションは十分 ではなかった。

5. 終りに

ミトラエウムは秘密の場に存在しているといった解 釈が一般的であったが、むしろそれは人気のあった公 共施設である浴場の近くに位置しているものが多く、 実際に浴場とつながることでミトラエウムは人々に とって公共性の比較的高い空間になっていた可能性を 指摘した。また、浴場は裏通りや周辺施設とつながる ことで都市の結節点としての役割を果たしていた可能 性あることが分かった。

生活に密接にかかわっていたと考えられる宗教と浴 場の空間がどのように接続していたのかを今回は、ミ トラエウムという具体例を用いて、可能性を指摘する に留まっているが、都市史や当時の市民たちの生活の 観点から宗教と浴場の空間に関する研究を進めること を今後の展望とする。

- 【注釈】
 1) MITREO FAGAN, MITREO PETRNI はオスティアに存在していたミトラエウムであるが
- 現存はしていない。 2) G. Becatti/ scavi di ostia /1953/p133-134
- 3) フランツ・キュモン / 小川英雄訳 / ミトラの密儀 /1993 4) Russell Meiggs/roman ostia/1960/p404-419
- 5) Bill Hillier, Julienne Hanson/The Social Logic of Space/1984 6) Hanna Stöger/Rethinking Ostia: A Spatial Enquiry into the Urban Society of Rome's Imperial Port-Town/2011
- 7) Roger Ling/A STRANGER IN TOWN: FINDING THE WAY IN AN ANCIENT CITY/1990

- 図 1:I. Gismondi 作成の地図に筆者加筆 図 2: 筆者作成
- 図 3: 参考文献 3) より 図 4, 5, 6: I. Gismondi 作成の地図に筆者加筆